

茨城論壇

茨城女子短期大名譽教授

小野 孝尚

「開誘（教え導くこと）の方法」では、子どもたちを整理させ保育室に導き、奏樂に合わせて歌を歌う。それから恩物の第一から第六の中で一種類を選び、順を追って構造の物体を作り、好きなままにまな物体を作ったら、時間を見て箱にしまわせ、それから遊戲室に行き遊ぶ。昼食時には、規律整頓する。食後の隨意の時間であっても保育者は、監督を怠ることはしないように。「子供の本性は却りて随意の時に現れる」と書いているように子どもの本性は予想に反することもあり、自由な時間等にも注意しながら見守らなくてはならない。



保育者については、「保母は種々新案を以て遊戲に充つる歌詞及所作をも工夫し古きに換へしむる意匠あるべし。」と、遊びや遊びにする歌詞や所作等を工夫しながら新しいものに変えていく心構えを持っていなければならないと述べている。これは、従来のものに固執せずに、より良いものを目指すという非常に柔軟で進歩的な考え方であろう。

『保育の栞』は、幼稚園での教育方法、保母の資質、保育の留意事項、保育の方法、そして25条に分けた保育者の心得について書かれたものである。『保育の栞』は、幼稚園での教育方法、保母の資質、保育の留意事項、保育の方法、そして25条に分けた保育者の心得について書かれたものである。

「保育の栞」の心得25条

最後に25条に分けて保育者の心得について書かれているが、英雄の幼児教育に関する最初の知識と経験が余すことなくみなぎっている条文である。二、三の条文を除けば、ほぼ現在に通じる保育の基本的なことである。

心得について書かれたものがあり、英雄の子ども観・保育観・保育者観が良く表れている。毛筆による和漢混交文とも言える文章表現の筆使いの流れの中から、生き生きとしたものが浮かび上がり、英雄の幼児教育に対する熱意とそ

のであるとすれば、『保育の栞』は、明治十年前後から明治二十年代半ば位までの幅広い文章を含むことになり、執筆時期を一点には絞り込むことは出来ないものと思われる。「とあるように、幼児教育者として活動していた最初期時代のものと考えられる。現存する手記の1880年7月と記された「育子トハ何ソ」や「小児教育論」、「幼稚園保母ノ目的ハ氣長」、「植物ノ性云々四葉」等の同内容は、『保育の栞』に収録されており、『代紳録全』、『代紳録二』、『恩物大意』等にも記載されている。

英雄は、資料等の保存を大切にしていたので、『保育の栞』は、元々英雄自身が幼稚園に関わった時代の経験による手記として残してあったものを1928年の8月に倉橋惣三が水戸の英雄宅を訪ねたことにより、話題として手記のことについて触れ、そこから発展し、推敲しながら浄書し、倉橋惣三に送り、倉橋惣三の手により、29年8月号の『幼児の教育』に第1回目が掲載され、次いで「承前」として9月号に掲載されることになったものであろう。そしてその後の30年5月に発刊された『日本幼稚園史』に収録された。

結びに、英雄のひ孫の高橋清賀子先生は、「英雄が力を入れていたのは、女子・幼児教育ですが、中でも幼児教育者の育成にありました。」と言っていたが、昨今の幼児教育を志す学生の減少傾向の中、もう一度幼児教育の原点に戻り、社会全体が幼児教育の重要性を再認識し歯止めを

おの・こうしょう 茨城女子短期大名譽教授 1944年生まれ。水戸市在住。大正大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。茨城女子短期大前学長。2017年「茨城の近代詩人群像」、19年「幼児教育・女子教育の先達 豊田英雄とその時代」を茨城新聞社から出版。茨城の文学研究をライフワークとし、豊田英雄の教育理念の次世代への継承と顕彰活動に努めている。

の息遣いを深く感じられる。このように見ると、『保育の栞』の執筆時期については、『豊田英雄と草創期の幼稚園教育』（2010年3月1日 建帛社）の「『保育の栞』の謎と意義考」にあるように「当時少しばかり書き置きしたものの」が数点の文書であり、それらを昭和3年の時点で整理し、浄書したものであるとすれば、『保育の栞』は、明治十年前後から明治二十年代半ば位までの幅広い文章を含むことになり、執筆時期を一点には絞り込むことは出来ないものと思われる。「とあるように、幼児教育者として活動していた最初期時代のものと考えられる。現存する手記の1880年7月と記された「育子トハ何ソ」や「小児教育論」、「幼稚園保母ノ目的ハ氣長」、「植物ノ性云々四葉」等の同内容は、『保育の栞』に収録されており、『代紳録全』、『代紳録二』、『恩物大意』等にも記載されている。

英雄は、資料等の保存を大切にしていたので、『保育の栞』は、元々英雄自身が幼稚園に関わった時代の経験による手記として残してあったものを1928年の8月に倉橋惣三が水戸の英雄宅を訪ねたことにより、話題として手記のことについて触れ、そこから発展し、推敲しながら浄書し、倉橋惣三に送り、倉橋惣三の手により、29年8月号の『幼児の教育』に第1回目が掲載され、次いで「承前」として9月号に掲載されることになったものであろう。そしてその後の30年5月に発刊された『日本幼稚園史』に収録された。

結びに、英雄のひ孫の高橋清賀子先生は、「英雄が力を入れていたのは、女子・幼児教育ですが、中でも幼児教育者の育成にありました。」と言っていたが、昨今の幼児教育を志す学生の減少傾向の中、もう一度幼児教育の原点に戻り、社会全体が幼児教育の重要性を再認識し歯止めを